

現地学生と発掘する宿場の歴史 栗原 佳

清水家は中山道芦田宿年寄役、芦田村役人を務めた家です。同家の文書は芦田村年貢関係の帳簿がまとまって遺されており、和宮下向時の資料などもありました。2回の作業で未整理の歴史資料全 426 点の保存処置と目録作成が完了致しました。

昨年の11月に3日間行われた調査のうち、私は2日間参加することができた。7月の調査に参加して、近世の街道の雰囲気が残る芦田宿でかつてその宿の担い手であった先人たちの史料を調査・保存できることは恵まれていると感じた。そのため、今回もこの調査に参加できたことはとても嬉しい限りだ。

前回は襖の裏張りをはがして洗浄する作業が中心であったが、今回私が担当したのは現状記録と目録取りである。だが、その前に私に与えられたのは所蔵者の土屋さんが新たに見つけてくださった本物の高札を解読するという作業。江戸時代に書かれて以来そのままの史料であるから墨もほとんど消えていて、時折光に当てながらの判読であった。幸い史料の内容は無事に読み取れ、捨て馬の禁止に関するお触れ書であることが分かった。芦田宿の事情は分からないが、近世の街道で馬を放置あるいは廃棄するという事例が多発していたことを表す貴重な史料で、新たな知識を得ることができた。

現状記録では撮影を行いつつ、史料を封筒に入れていく。どんな史料が出てくるのかいち早く知ることができるので、いわば宝探しの感がある。今回も和宮一行が通行する際の宿割りの帳簿などが多く出てきた。宿割りには絵図も付属していたため、ここは「〇〇家」の先祖だという情報を土屋さんが丁寧に教えてくださり、その度に話に花が咲いた。

今回の調査では町長さんのご子女には主に文書の修復や洗浄、副町長さんのご子息には主に現状記録に意欲的にご参加いただいた。私は現状記録をご一緒できることになったが、ご子息は日本史に大変詳しく、一つ一つの史料に大変な興味を示していた。私も史料の内容を簡単に教えつつ史料を取り上げていたが、後半ではどんな史料であるかをほとんど彼が言い当て

るほどになっていた。私も本業でこんな授業がしてみたいという願望とともに、いずれ地元の生徒にこうした歴史との関わりを持たせてあげたいという決意を抱いた。進学のための忙しい時期に調査にご協力いただいたことを心より感謝申し上げたい。また、町長さんのご子女も文化財方面の進路を目指しているとお聞きした。そうした関心をこの調査に向けて実際に参加して下さったことを心より感謝申し上げる。

目録とりでは年貢徴収に関する帳簿がまとまって出てきたことがまず興味深かった。年貢に関する史料は自治体史に掲載されることが多いが、それでも本物の年貢の帳簿類がこうして出てくることはとても貴重だ。史料の年代は安政から慶応にかけてのもので、これは和宮が通行した時期と重なっている。和宮が江戸に下向するという一大イベントに関わった芦田宿の歴史を、今後様々な側面から理解するための有用な史料になると考えられる。

興味深い史料を発見・判読することができた今回の史料調査。前回よりもさらに地元の方々に史料と関わっていただけた。やはり地元の方々に先人の史料を知っていただき、保存していただけることが何よりの願いであるので、その一步を更に進めることができたと思う。もちろんこの調査で自分の知識を更に深められ、新たな出会いも得たという喜びもある。その上で文化財を保存することの意味をこの地域の一人でも多くの方々に分かっていたいただかなければいけない。この町に来ると常にそのことを前向きに考える。



第8回 南伊豆を知ろう会の報告を聞いて

上岡 史拓

2015年11月28日、南伊豆町湯けむりホールで開催された『第8回 南伊豆を知ろう会』に参加した。当日は晴天に恵まれたこともあり、来場者が70名を越える盛会となった。

第一報告は、藤井達也氏（水戸市立博物館）による「地域のお寺が迎えた近代—上賀茂最福寺の明治」であった。氏の報告では、上賀茂最福寺が現在の姿になるまでの過程が丁寧に復元された。また、最福寺が村堂の設立・再興主体となったり、廃堂の仏像を合祀したりといった物的側面でも、村内の葬祭場としての心的側面においても、村の寺院として上賀茂村を支える役割を担っていたことが明らかにされた。

第二報告は、南隆哲氏（公益財団法人小堀遠州顕彰会）による「南伊豆の船と流通を考える」であった。氏の報告では、伊豆は古代以来、海上交通が盛んな地域であり、近代に入ってから汽船も登場するが、採算が合わないことや難破の憂き目にあったことなどから、沼津～東京間を巡航するルートが廃

止され、下田を境にルートが東西に二分化されたこと。政府の近代化政策により、和船の廃止と汽船の使用を強制する法律が施行されたが、その法律の網をかいくぐるように、「合の子船」と呼ばれる和洋折衷の船が建造され、それがこの地域の明治初期の海上交通・流通を支えていたことが明らかにされた。

現在、南伊豆町では『南伊豆町史』を編纂・刊行中であり、藤井氏の報告も既刊の『南伊豆町史』の成果を多分に受けている。NPO 法人歴史資料継承機構じゃんぴんの資料調査活動が『南伊豆町史』に還元され、またその成果をもとに、今後の『南伊豆を知ろう会』で充実した報告がなされる、という良い循環が生まれることを期待したい。



2015年9月関東東北地方豪雨で被災した常総市役所公文書レスキューについて

平野 暁子・吉原 大志

2015年9月の関東東北地方豪雨においては、茨城県などが大きな被害にみまわれた。ここでは、ボランティアによる保全活動が大規模に行われた常総市役所公文書レスキューのうち、筆者が参加した9月30日～10月1日について報告する。

レスキューの対象となったのは、市の永年保存文書庫に保管されてきた公文書で、古いものでは元禄期の文書も含まれる。文書を保管する書架は6段あり、下から3段目までが完全に水没したことから、水損を免れた文書、含水してはいないが湿気を帯びているもの、汚水、泥を含んでいるものなど被害程度が異なり、カビの発生が著しいものも多くあった。作業は搬出班、乾燥・洗浄班に分かれ、デジカメ撮影による現状記録をとりながら書庫から出した被災文書を、被害程度に応じて市役所敷地内の一時保管施設内に移した。

乾燥・洗浄班では、基本的には簿冊やファイルで

立てて乾燥し、文書の状態を見ながら実験的に洗浄作業を行った。特に劣化の酷い文書はカビの発生と腐敗臭が強く、ぬめりが出ているものが散見された。そこでエタノール水溶液 70%を満たしたプラスチック容器に、一冊ずつ文書を浸し刷毛で泥やカビを撫でて落とす。また、カビの活性化を抑える為に、ビニール袋に4、5冊ずつパッキングし、常総市から用意して頂いた家庭用冷蔵庫へ保存し、今後の処置を検討することとした。

今回のレスキューは、常総市からの支援要請を茨城県立歴史館が受け、それを茨城史料ネットが支援するかたちで展開し、さらにそこから、歴史資料継承機構や各地の史料ネット、資料所蔵機関のメンバーがレスキューに加わった。大規模なボランティア活動による「公文書」のレスキューとして、東日本大震災以後の蓄積の成果と言える。今後も継続的に支援していく必要があるだろう。

常陸太田市武子家文書にみる長谷村

武子 裕美

茨城県常陸太田市武子家調査は、茨城史料ネットの協力を得てこれまでに3回実施している。3回の調査が終了した結果、386点の目録を作成し、襖の裏貼りは63点解体した。作業は引き続き継続中であるが、今回はこれまでの作業成果から、武子家が所在する長谷村について垣間見よう。

武子家文書の中に、明和9年10月付の写しで「長谷村辰御年貢可納取附之事」(B33)がある。ここから長谷村の石高は106石2斗4升であることが分かり、『茨城県史料』維新編の「各村旧高簿」によると、長谷村の村高は、水戸藩領分が103石余りであり、幕末期まで大きく変化しない。長谷村では30%程度の年貢率だったようである。年貢率があまり高くない理由として、風当地30石余りが免除とあり、実際に「風が冷たくて水が冷たいので年貢を免除して欲しい」という願書が出されているなど、風が強く寒冷な地域だったようである。

「(御用留、御達書取調差出候様書上)」(C60-30)は天保12年6月の長谷村の人口が記載された御用留の一部である。長谷村の総人口は67人(男36人、女31人)であった。更に「久慈郡長谷村惣人別改元帳」(A43-3)にも長谷村の人口と馬数が記載されており、明治2年に家数が15軒(内8軒隠居)で、男43人、女42人などとあり、幕末期にかけて若干人口が増加している。

「天保田畑絵図書上」(B8)では長谷村内に水戸藩の御林があり、その場所を詳しく描いている。観音堂や仁王門の記載も見られ、長谷村にあった密蔵院(『じゃんぴん』vol.16参照)と考えられる。南窓院

(常福地村。本山派大先達長谷村密蔵院下の年行事職として下住を支配。現存しない。(『茨城県の地名』平凡社))が持っていた場所も記されており、現在の地形との対照が出来るのではないかと考える。B-10では、南窓院は森式部を神職に取りたてるので氏子一同(幡村にある長幡部神社の氏子)誠意を持って敬うようにとの書状が郡奉行・寺社奉行より長谷村三役に対して出されている。そこには「長幡部神社之儀久慈郡六坐之明神機織之祖神二付、此度森合南窓院事森式部神職御取立被遊、各奉仕職被仰付、神領等御寄附被遊、其村之儀も氏子被仰出候条、此上一統無二念誠敬を尽し農桑之本業相励一村之繁栄子孫之永續を祈候様可改者也」とあり、おそらく南窓院が無くなり、その住職が神職に変わった際のものではなかろうか。水戸藩の寺社政策との関連と合わせて検討する必要がある。また、「農桑之本業」とあり、長谷村では桑の栽培が行われていたことも注目される。

武子家文書は旧長谷村におけるおそらく唯一の文書群だと考えられる。万一失われていたら長谷村について全く分からないことになっていた。今後近世・近代の長谷村、ひいては常陸太田市を考える上で有効に活用されればと考える。



↑ 2002年7月撮影
—裏貼りのはがし作業

活動報告

2015年12月20日 『じゃんぴん』vol.20刊行
2016年1月16日 第17回例会開催
1月22～23日 秩父市今宮神社文書調査・保存活動
2月9日 南伊豆町渡辺亮家移管作業
2月21日 青梅マラソンランナー支援ボランティア
3月5～6日 常陸太田市武子家文書調査・保存活動
3月19～20日 第2回史料ネット全国集会
「NPO法人歴史資料継承機構じゃんぴんの
ミッションと東日本大震災」(西村慎太郎)

3月20日 幕藩研究会
「常陸太田市武子家文書に見る長谷村」(武子裕美)
3月25日 東洋美術学校修復文書受領
(茨城史料ネット・肥田家)
3月26～28日 立科町土屋家文書調査・保存活動
3月26～28日 立科町清水家文書調査・保存活動
4月10日 杉並区蒲生家文書調査・保存活動
4月29～5月2日 南伊豆町肥田家文書調査・保存活動

その他、茨城史料ネットの活動に協力
東洋美術学校での文書修復作業(茨城史料ネット・肥田家)

民間所在資料との関わり方

金子千秋

2016年1月16日(土)に学習院大学で行われた第17回例会、国文学研究資料館の高科真紀氏による「段階的資料調査における資料保存—その実践と課題—」に参加しました。お話では、民間所在資料調査とは、現地で保存することを前提に行う調査だという確認の後、調査と保存活用について、阿波根昌鴻資料調査会とエリザベス・サンダース・ホーム資料調査会の事例から説明していただきました。

阿波根昌鴻資料調査会は、阿波根昌鴻氏が収集した太平洋戦争に関する資料を対象とし、エリザベス・サンダース・ホーム資料調査会は、澤田美喜氏が収集した隠れキリシタンに関する資料を対象としています。両者とも資料館や記念館がありません。

資料調査について、まず保存管理計画が重要ということ、そして①初期調査②本格調査③展開調査と、段階的に調査する方法を説明いただきました。その中で留意点として、①優先順位を付けること②予算・技術など、長期的に所有者が管理できるレベルで手を加えること③どのような活動を行っているか所有者へ報告し、共通理解を図ること、を挙げておられたのが印象的でした。特に阿波根昌鴻資料調査会では、設立者本人や運営主体の意向を汲み、時に資料保存よりも展示に重点を置くこともあるそうです。また展示の変更時は、違和感のない変更を心掛け、変更箇所は必ず所有者に見せ、確認をとるとのことです。

民間所在資料は、その所有者や運営主体が中心となって運用すべきものであり、そこに我々がどのような姿勢で関わらなければならないのか、改めて考えさせられる内容でした。特に所有者の意向を尊重するということや共通理解を図るということは、地域を含めた信頼関係を築くことに繋がり、未永く良い調査体制をつくるのに不可欠だと感じました。

またお話や質疑応答では、資料の保存方法や道具、ボランティアの活用方法など、実践に関する具体例を聞くことができ、大変有益な時間となりました。



「じゃんびん」の活動とその取り組みの意義 —「平成28年熊本地震」を受けて—

三角菜緒

2016年3月19日、20日、第2回全国史料ネット研究交流集会在郡山で開催された。ここで西村氏は、じゃんびんが茨城史料ネットがレスキューした資料の公開・普及の面で活動協力していると報告された。この点につき、地震の発災を受けた今感じることを述べたい。

2016年4月14日に発生した熊本地方を震源とする地震を受け、翌日九州国立博物館では「みんなでももる文化財みんなをまもるミュージアム(みんなも)事業」で構築された九州・山口の文化財行政関係者のネットワークを利用して、後方支援のための情報収集を開始した。しかしその後発生した本震及び阿蘇・由布市を震源とする地震によって被害が拡大、全容の解明には未だいたっていない。

この地震を受けて、未指定の民間所在資料を救おうとする動きが官・民双方で始まっている。防災ネットワーク・みんなも・九州山口ミュージアム連携事業事務局は、民間所在資料の被災情報を求める公文書を作成、熊本市博も呼びかけと問い合わせ窓口を開設している。また熊本の歴史研究者を中心に史料ネット立ち上げも急ピッチで進んでいる。東日本大震災を経て、民間所在資料レスキューが社会に通念化したことを実感するとともに、多方面から支援の申し出が寄せられていることに感謝している。

しかしその一方で、レスキューはその後十数年単位に及ぶ活動の出発点にすぎないことにも関心を向けてほしいと思う。レスキューしたものを誰が、どのように整理していくのか、拠点はどうするのか。返却を断られた場合、どうするのか。レスキューが一段落して、世間の関心が薄れてから活動を継続させることこそが容易ではないのである。この点じゃんびんの活動は、レスキュー後の資料を託された自治体や史料ネットに寄り添い、精神的・実務的に支える役割を果たしているのではないかと考える。現地においては、膨大な数の歴史資料がレスキューされ、これら資料の整理・活用・保存・継承が次の課題になる。じゃんびんのもつ歴史資料の保存・継承・公開のノウハウが熊本地震においてもいかされればと感じる次第である。

NPO法人 歴史資料継承機構
News Letter
じゃんびん Vol.21

●発行●

〒198-0063
東京都青梅市梅郷3-863-2西村方
NPO法人 歴史資料継承機構
E-mail: info@rekishishiryo.com
URL: http://rekishishiryo.com/

●発行所●

NPO法人 歴史資料継承機構
代表理事 西村慎太郎

編集: 武子裕美
イラスト: 朝倉麻子

